

経済・金融 フラッシュ

2010年4-6月期 資金循環統計

個人金融資産は前年比微増の1445兆円

経済調査部門 シニアエコノミスト 上野 剛志

TEL:03-3512-1870 E-mail: tueno@nli-research.co.jp

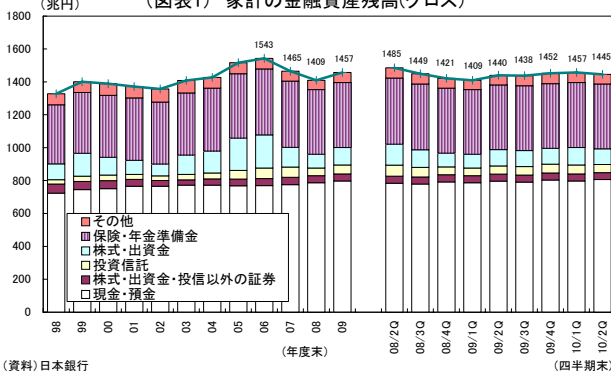
1. 個人金融資産残高(2010年4-6月期末): 前期末比では▲12兆円の減少

2010年6月末の個人金融資産残高は1445兆円、前年比微増(5兆円増)となった。1年間で11兆円のネット資金流入があったものの、時価変動のマイナス影響▲6兆円(うち株式・出資金が▲5兆円、投信が▲2兆円)が響いた(図表1)。

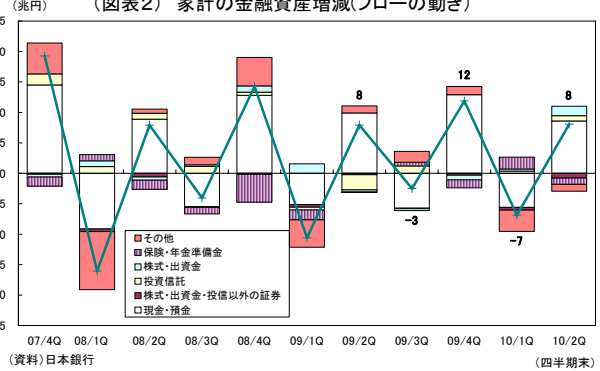
四半期ベースでは、前期(2010年1-3月)末比▲12兆円の減少となった。4-6月期は一般的に賞与の支給月を含むことから、例年フローで流入超過となる傾向があり、今回も8兆円の流入超過となったが、株式・出資金、投信などの時価減少の影響▲20兆円がこれを上回った(図表2~4)。

前年比でも前期末比でも株安・円高が進むなど、運用環境はかなり厳しく、個人金融資産への逆風となって現れた形だ。

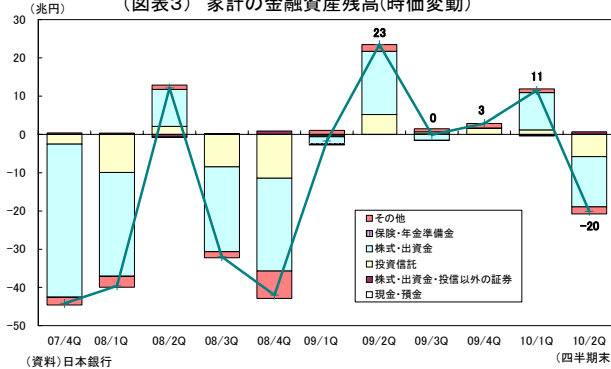
(図表1) 家計の金融資産残高(グロス)



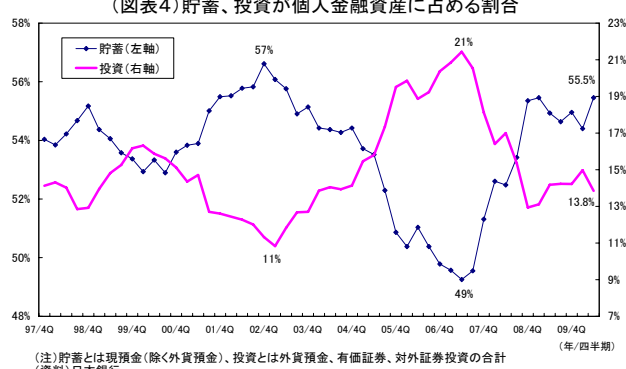
(図表2) 家計の金融資産増減(フローの動き)

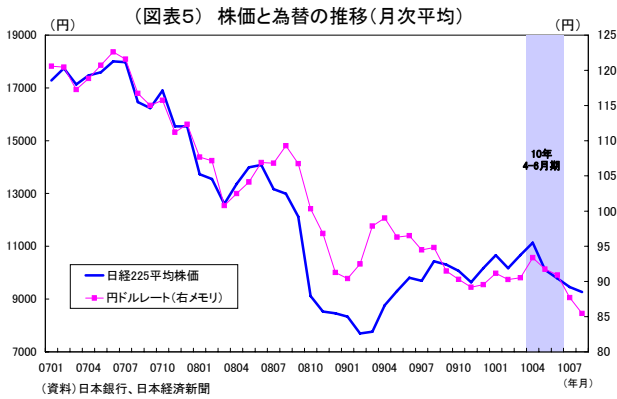


(図表3) 家計の金融資産残高(時価変動)



(図表4) 貯蓄、投資が個人金融資産に占める割合

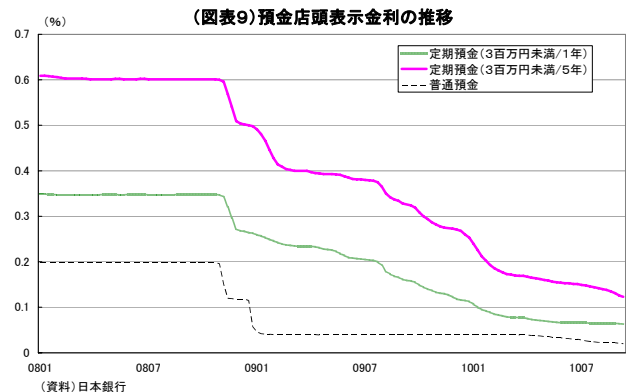
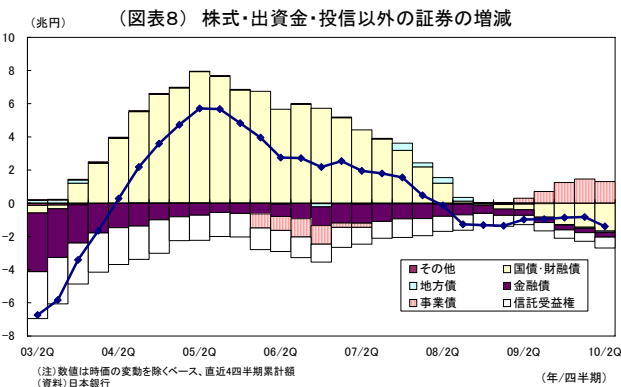
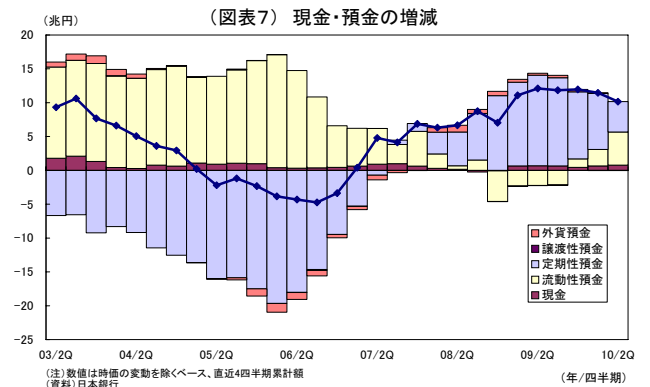
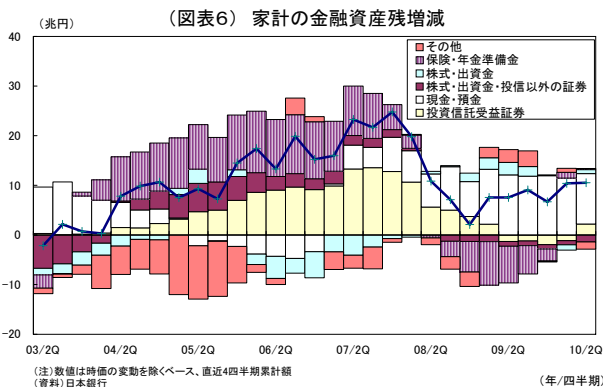




2. フロー(時価変動を除いた流出入額)の基調: 安全性重視、運用難の色彩強い

四半期ベースでフローの内訳を見るにあたり、季節要因を除くため、直近4四半期累計というやや長めの基調を捉えた動きをみると、07年度以降、株安・円高を背景に投資信託への資金流入が大幅に減速し、金融資産への流入の大部分を現預金が占めている状況が続いている。株式・出資金への流入も進んでおらず、引き続き安全性重視の姿勢が強いようだ。

現預金の内訳に着目すると、近年定期性預金への流入が大部分であったが、最近では普通預金など流動性預金への流入増加が顕著になっている。市場金利の低下に伴って、定期預金の金利も低下傾向にあり、家計が運用難から流動性預金に資金を滞留させている可能性がある(図表6~9)。



(お願い) 本誌記載のデータは各種の情報源から入手・加工したものであり、その正確性と安全性を保証するものではありません。また、本誌は情報提供が目的であり、記載の意見や予測は、いかなる契約の締結や解約を勧誘するものではありません。